2022 年 7 月 17 日　於　室伏鴻アーカイブカフェ Shy

消尽と稀少性

――ドゥルーズ「消尽したもの」をめぐって――

江川隆男

ベケットの言語

(1)「この原子的、離接的な、切断された、途切れがちの言語を、ベケットの言語Ⅰと呼ぶことにしよう。数えあげることが命題にとって代わり、結合的関係が構文的関係にとって代わる。つまり、名詞の言語である。しかし、もしこんなふうに言葉によって可能なことを消尽しようと望むなら、言葉そのものをもまた消尽することを望むべきである」(ジル・ドゥルーズ「消尽したもの」宇野邦一訳、ジル・ドゥルーズ、サミュエル・ベケット『消尽したもの』所収、白水社、一九九四年、一四頁)。

(2)「この言語Ⅱは、もはや名詞の言語ではなく、声の言語であり、結合可能な分子によって作動するのではなく、混成可能な流れによって作動する。声は、言語の粒子を導き配分する波動、または流れである。言葉によって可能なことを消尽するとき、ひとは原子を刻んで切り裂く。そして言葉そのものを消尽するときには、流れを枯渇させる」(一四 - 一五頁)。

(3)「もはや言語活動を、列挙可能で組合せ可能な物にも、それを発する声にも結びつけることのない言語Ⅲが存在する。この言語は、たえまなく移動する内在的限界に、間隙、穴、または亀裂に、言語活動を結びつける」(一七頁)。

(4)「ここで見られ聞かれた何かは、視覚的または音声的な〈イメージ〉と呼ばれる。ただし他の二つの言語によって拘束されていたイメージを、その連鎖から解き放たなくてはならない。もはや、言語Ⅰとともに系列の一全体を想像することも(「理性で損なわれた」順列組合せの想像力)、言語Ⅱとともに物語を考えだし、思い出の目録を作ることも(記憶で損なわれた想像力)重要ではない」(一七頁)。

(5)「少しも損なわれていない純粋なイメージ、まさにイメージそのものを作りだすこと、一切の人称的なもの、合理的なものを保存することなく、十全な特異性のうちにイメージが出現するような地点に到達し、天上的な状態にも似た無限定なものに接近することは実

に困難である」（一八頁）。

（6）「イメージは、一つの物ではなく、「プロセス」である。このようなイメージは、物の観点からは実に単純でも、その力能は未知のものだ。それは、言語Ⅲであって、もはや名前や声の言語ではなく、響きや色彩をもつイメージの言語である」（一九頁）。

（7）「とにかくイメージは、精神の王国に君臨する〈見ちがい言いちがい〉、〈見ちがい聞きちがい〉の要求に答えるのだ。そして精神的な運動としてイメージは、それ自身の消滅や散逸の過程と不可分なのだ。その過程が時期尚早にせよ、そうでないにせよ。イメージは一つの呼吸、息吹であるが、それは消滅の途上で吐き出されるものだ。イメージ」（三七頁）。

言表について

（8）「この任務は、けっしてすべてが語られることはない、という原理に依拠している。自然言語において言表されえたかもしれないことに対して、言語学的諸要素の無際限な組合せに対して、言表は（それがいかに多数であるとしても）つねに不足している」（ミシェル・フーコー『知の考古学』槙改康之訳、河出文庫、二〇一二年、二二五頁）。

言表：命題（対象）、言葉（意味）、文（主体）を派生させるもの